

2019年度  
日本語  
(問題)

<H31132181>

注意事項

- 一 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 二 問題は2～6ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 四 受験番号および氏名は、試験が開始されてから、解答用紙の所定欄に正確に記入すること（左の記入例参照）。所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。なお、解答用紙が複数枚ある場合には、それぞれの所定欄に記入すること。
- 五 受験番号の記入にあたっては、左の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に記入すること。読みづらい数字は、採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

(記入例)

53001番



| 万 | 千 | 百 | 十 | 一 |
|---|---|---|---|---|
| 5 | 3 | 0 | 0 | 1 |

(数字見本)

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|

- 六 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 七 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き、解答用紙を裏返しにすること。
- 八 いかなる場合でも解答用紙は必ず提出すること。
- 九 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

二十世紀の初頭に確立された現象学という哲学の方法論があります。その現象学には「間主観性」という考え方があり、この考え方を社会に **X** したのが、アメリカの社会学者アルフレッド・シュッツです。簡単にいえば、次のような考え方です。

私たちは、自分が考えたり思ったりしていることを「主観」というけれど、私たちは社会的な存在で、社会の中で言語を使って生きているのだから、自分自身の主観性は、 **A** 人々が作った主観性の中で行っていることにすぎない、と。この考え方が、私たちは言語世界の中で生きているかぎり、完全な孤独はなく、完全に孤立することはない、ということの根拠です。

**B** 一人でいることはいけないことだ、という社会からの刷り込みも間主観性の一つです。その他にも、私たちは、社会が作り上げた物事の考えを、あたかも自分 **p** 考えたことのように、そのまま語っていることが多いのです。主観的なことを言っているように見えて、じつはこれ **q** 社会を作ってきた無数の人々が作り上げたものを、そのまま自分が語っているにすぎないのだ、ということです。

**C** 純粋な自分の主観的な考えと、社会によって作られた主観性との二重の主観性があったて、私たちは社会によって作られた主観性の **①枠組み**の中で物事を考えているということです。

社会が作り上げた主観性の影響はどうしても強い。言語世界や社会から離れて完全な孤独になり、全く自由に様々な思考を **②巡らせて**みたいと思っても、社会が作り上げたものの中に自分自身 **r** どっぷりと浸かっているわけだから、それは絶対にできないということです。

そうすると、私たちは、すべて社会の主観性で動かされている、受け身的な存在になってしまふ。では、社会の間主観性に引きずられつばなしなら、「個」は、どのような形で確立し、存在するのだろう、という疑問が **③トウゼン**、わいてきます。

そこでクローズアップされるべきものが「孤独力」なのです。

いつも **④アットウ**的な力で自己を支配しようとする社会で生きなければならないからこそ、ときに意識的にそうした社会から離れなければならないのです。

一日二十四時間、そのような社会的な言語で支配されている状態でいつづけると、自分というものの、本来の自己というものを取り戻せないのではないか。自分が自分に戻るために、意識的に社会の様々な関係性から離れようとする力、つまり孤独力をつけなければならないと、私は思っています。

孤独な状態に自分を置くことは、極めて意識的で主体的な行為です。何となく孤独であるとか、他律的に孤独な状態に置かれたような場合とは全く違う。ここをきちんと分けていければ、決して **⑤孤独がネガティブなものではないこと**がわかると思います。

同じく意識的に社会から離れる行為として孤独があります。この場合は、これから先もずっと社会との関係を断つというようなニュアンスが強い。そこが孤独との違いだと思います。私がいう孤独は、社会で戦うための陣地ですから、必ず再び社会 **s** 戻るという意志を秘めているのです。つまり「自己を取り戻すための孤独」ということです。私は、孤独をそういうふうにも再定義するべきだと考えています。

もともと「孤独」は、自己 **⑥カイフク**のための「装置」としてとらえられてきました。二十世紀初頭のドイツの哲学者であるニーチェは、このようなことを言っています。

孤独な人々は、一人でいることにすっかり慣れてしまい、そのために自己と他人とを比較することもなく、安らかな喜ばしい気分で自己 **t** 相手に楽しい会話を **⑦交わし**、 **D** ほほえみを浮かべて独自の生活を積み続ける人だ、と。ニーチェは、孤独であることをプラスに評価していたのです。ニーチェ自身、孤独であることを楽しんでいたのでしょ。だから、一人でいたいと思う人には、一人でいることを気持ちよく許してやろうよ、という。一人でいることを哀れむような、そんな愚かなことをしてはいけないといっているのです。

**E** ニーチェは、孤独の最も優れているところは、深い静けさの状態であり、その中で自分は世の中に **⑧逆らつ**

で生き、成長していくことができる、それは、世の中が⑨火や剣をもつてしても、私から奪うことができないものである、ということも言っています。

自分と他人とを比較するような弊害、**F**嫉妬というような感情など**U**も逃れられるということで、一人でいることは非常に快適なよい状態だと、述べているのです。ニーチェと同じように、私たちも一人でいることは気持ちのいい状態だということを、まず認める必要があります。

アメリカにも、一人でいることを⑩勧める哲学者や思想家は数多くいます。アメリカ建国の歴史の流れの中で、この国は基本的に自主自立の国であって、その気風は孤独の力で切り開いてきたという誇りがあるようです。

二十世紀を代表するアメリカの哲学者エリック・ホッフアーは、人間は孤独と連帯を適度に混ぜ合わせた存在だが、アメリカという新しい国が作られたのは、孤独な人間たちが⑪カイトクした結果である、と述べています。アメリカを作ったのは、人々の連帯の結果ではなく、孤独な人間のエネルギーなのだと思います。孤独の力を⑫コウデイ的にとらえ、人間たちの孤独力が建国のパワーになったとみているのです。

武長脩行『友だちいない』は、恥ずかしいのか』による。

注 「刷り込み」：最初の知識がその後の行動や判断の基準となるように強く印象付けられること。

問一 空欄 **X** に入る語として最も適切なものを、次のア～力の中から一つ選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア 引用    イ 運用    ウ 慣用    エ 作用    オ 通用    カ 適用

問二 空欄 **A**・**B**・**C**・**D**・**E**・**F** に入る語として最も適切なものを、それぞれ次のア～力の中から一つ選び、解答欄に記号で答えなさい。(同じものを二回以上使わないこと。)

ア あるいは    イ さらに    ウ じつは    エ どころか    オ たとえば    カ つまり

問三 空欄 **p**・**q**・**r**・**s**・**t**・**u** に入る語として最も適切なものを、それぞれ次のア～力の中から一つ選び、解答欄に記号で答えなさい。(同じものを二回以上使わないこと。)

ア が    イ から    ウ で    エ に    オ まで    カ を

問四 傍線部①②⑦⑧⑩の漢字の読みを平仮名で解答欄に書きなさい。

問五 傍線部③④⑥⑪⑫の片仮名を漢字に直して解答欄に書きなさい。

問六 傍線部⑤はどのようなことを言っているのか、この文章全体の内容をふまえて、わかりやすく説明しなさい。

問七 傍線部⑨はどのようなことを言っているのか、具体的に、わかりやすく説明しなさい。

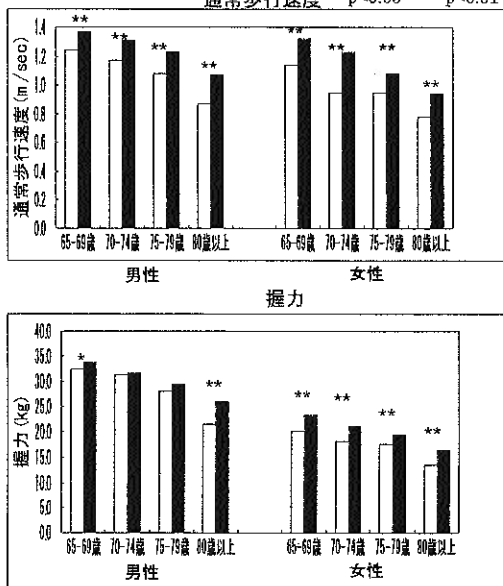
二次の文章は、「高齢者」の定義について述べたものです。これを読んで後の問いに答えなさい。

わが国を含む多くの国で、高齢者は暦年齢六十五歳以上と定義されている。しかし、この定義には医学・生物学的な根拠はない。このような定義が一般的になったのは、一九五六年、世界保健機関（WHO）が六十五歳以上の人口が七%を超える社会を高齡化社会（高齡化しつつある社会）と定義したことによるとされている。WHOが六十五歳という年齢を高齡化の定義に使用した理由はよくわかっていないが、当時の欧米諸国の平均寿命が、男性で六十五歳前後、女性で七十歳前後であり、感覚的に六十五歳という年齢が①節目の年として受け入れられやすかったことが考えられる。ボーヴォワール女史の大著『老い』（一九七〇年刊）にも「本書では六十五歳以上を高齡者としよう」というくだりがある。

その後、各国の平均寿命は延伸した。特に我が国においてはその伸びが②イチジルしく、二〇一六年では男性八十八・九八、女性八十七・一四歳となっている。このような状況をⅠに、我が国では近年、六十五歳以上という高齢者の定義が現状に合わない状況が生じている。高齢者、特に六十五〜七十四歳の人びとは、まだまだ若く活動的な人が多く、高齢者扱いをすることに對する躊躇、されることに對する違和感はその人が感じるであろう。

それでは本当に日本の高齡者は若返っているのだろうか。このⅡに對して科学的な視点からアプローチすることを目的に、日本老年学会と日本老年医学会は、医学、生物学、看護学、社会学、心理学、教育学などの専門家が集まる学際的な合同ワーキンググループを作り、二〇一三年に活動を開始した。ワーキンググループでは、いくつかの縦断的コホート研究の結果や国の疾病統計などを調べた。たとえば、東京都健康長寿医療センターが秋田県南外村でおこなっていた研究によれば、一九九二年と二〇〇二年の調査で、図にしめすように、六十五歳以上の住民の歩行速度と握力が、ほぼすべての年代で有意にⅢしており、二〇〇二年時の七十五〜七十九歳の歩行速度は一九九二年時の六十五歳〜六十九歳と同じであった。握力も同様の傾向であった。a、生活能力指標でみた生活機能、認知症に罹患していない人の知的機能、残存歯数など、多くの身体的、知的機能が以前に比べて五〜十歳、指標によっては二十歳も若返っていることが示された。また脳血管障害など、高齢者に多い疾病の受療率や死亡率を調べたⅣでは、両者とも低下が認められ、日本人は病気にかなりにくくなっていることもわかった。すなわち、我々が日常生活の中で感じているように、若く元気な高齢者が増加している、言い換えればⅤが科学的にも証明されたのである。

図 同一コホートにおける10年間の通常歩行速度と握力の変化(文献1による)  
通常歩行速度 \*p<0.05 \*\*p<0.01



もう一つ重要な点は、国民が高齡者をどのように捉えているか、ということである。この点に関しては、内閣府が平成二十六年に行った国民アンケート調査で明らかになっている。b 何歳以上を高齡者とするかという問いに、男性では七十歳以上、女性では七十五歳以上とする回答が最も多かった。六十五歳以上とする回答は六・四%とひくく、八十歳以上とする回答も五年前に比べ③大幅に増加していた。これらの結果から、国民の意識も、高齢者を六十五歳以上とする現在の考え方から大きく変化していることがわかる。この調査では、さらに、何歳ころまで収入をとまなう仕事をしたいかという調査も行っている。その結果では、働けるうちはいつまでも、という回答が男女とも三〇%程度でもっとも多く、

六十五歳までという回答の約二倍であった。この回答には収入を得るために Y、自分のモチベーションを維持するために働く、という二種類が含まれていると思われる。その比率は明らかではないが、後者の人も少なくないことは明らかである。

日本人の身体機能、知的機能の変化は、V した秋田県コホートのデータのように、十歳前後の若返りを示した指標が多かったことから、ワーキンググループでは従来の六十五歳以上とする高齢者の基準を十歳上げて七十五歳以上とする提言を行った。また、超高齢者の定義については、従来通り九十歳以上ということも併せて提言した。問題となったのは、従来、前期高齢者とよばれた六十五〜七十四歳の年代をどう呼ぶかという点であった。たとえば「成人後期」など、高齢という言葉がなくしてしまうという意見もあったが、結局、准高齢者とよぶ案を採用した。「准」は国語学的には「準」と同じ意味であるが、准教授など、身分や地位に関して用いられることから、この文字をあてることにした。高齢という言葉をあえて残したのは、六十五歳という年齢が心身の衰えを感じ始める年代であることから、真の高齢期までの十年間に、健康や経済的なことなど、いろいろな面から準備をしてほしいというメッセージを込めたからである。この七十五歳という年齢が高齢者の中で転換点になることは老年医学の臨床④グンパでよく経験されている。すなわち、七十五歳以上になると、ある臓器の疾病の診療だけでなく生活機能に着目した医療が必要となることをしばしば経験することから、七十五歳という年齢は高齢者への臨床的な対応の転換点になる年なのである。

大内耐義「新しい高齢者の定義に関する提言とその意義」による。

注 コホート…ある集団とそうでない集団とを一定期間観察する研究。

問八 傍線部①③の漢字の読み方を平仮名で解答欄に書きなさい。

問九 傍線部②④の片仮名を漢字で解答欄に書きなさい。

問十 空欄 I V に入る語句として、最も適切なものを、それぞれ次のア〜カの中から一つ選び、解答欄に記号で答えなさい（同じものを二回以上使わないこと）。

ア 結果    イ 疑問    ウ 背景    エ 分布    オ 改善    カ 前述

問十一 空欄 a b に入る語句として最も適切なものを、それぞれ次のア〜オの中から一つ選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア すなわち  
イ ところで  
ウ そのほか  
エ しかし  
オ そのため

問十二 空欄 X に入る言葉として最も適切なものを、次のア〜エの中から一つ選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア 高齢者の病院好き  
イ 高齢者の一層の高齢化現象  
ウ 高齢者の健康志向  
エ 高齢者の若返り現象

問十三 図の棒グラフの中で、■で表される方は何年か、最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア 二〇〇二年    イ 一九九七年    ウ 一九八七年    エ 一九九三年    オ 一九九一年

問十四 空欄 Y に入る言葉として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、解答欄に記号で答えなさい。

- ア 働いてもかまわない
- イ 働くわけにはいかない
- ウ 働くといい
- エ 働かざるを得ない

問十五 この文章の提案によれば、六十五歳の人、七十七歳の人、九十四歳の人、はどう呼ばれることになるか、それぞれの呼び方を解答欄に書きなさい。

問十六 次のア～エの記述について、本文の趣旨に合うものには○を、合わないものには×をそれぞれ解答欄に書きなさい。

- ア 内閣府の調査では、「高齢者」とする年齢について、男女間の違いはない。
- イ 六十五歳という年齢は、なにかと心身の衰えを感じ始める年代であるといえる。
- ウ 我が国のこれまでの「高齢者」の定義とは、六十五歳以上の人ということである。
- エ 現在の国民の意識として、高齢者を六十五歳以上とする考え方に変化はない。

〔以下余白〕

問七

問六

問五

⑪

③

⑫

④

⑥

問四

⑧

①

s

p

D

A

⑨

ら

っ

て

⑩

め

る

②

ら

せ

て

⑦

わ

し

t

q

E

B

u

r

F

C

問三

問二

問一

X

H31132181

受験  
番号

万

千

百

十

一

姓

氏

名

氏

名

(所定欄以外に番号・氏名を書いてはならない)

2019年度

日 本 語

( 解 答 用 紙 )

No. 1 / 2

採点欄

問十六

ア

イ

ウ

エ

問十五

六十五歳

七十七歳

九十四歳

問十四

Y

問十三

問十二

X

問十一

a

b

問十

I

II

III

IV

V

問九

②

しく

④

問八

①

③

2019年度

日 本 語

( 解 答 用 紙 )

No. 2 / 2

採点欄